

長期間、治療を続けている方の手記。
他の患者さんの参考になるよう紆余曲折を
詳しく書いて下さいました。

「漢方、鍼灸によるクローン病治療6年の歩み」

Y. S 53歳

2016年1月15日

1. はじめに

これまでもクローン病の患者さんの手記を多数読ませていただきました。それらは中高生など若い方のもの（親御さんの手記を含む）が比較的多く、症状が順調に改善されている方が多いという印象を受けます。また、クローン病と診断を受けてからの年数も短い方が多いようです。その点、私が書かせていただく手記は必ずしも順調な経過ではなく、時間がかかっているという意味では異質なもののなのかもしれません。しかし、私がたどった経過をありのままに書くことによって、くじけそうになっている方や、今後治療に取り組まれる方の参考になればと思います。

経過

病気に関係があると思われるできごとを記します。

年月	年齢	生活の状況、症状など
1968年	6歳	鼻水が止まらず、毎週耳鼻咽喉科へ通院。吸引治療を毎回受ける。
1979年	17歳	腸が弱く、試験中に下痢でトイレに行くこともたびたび。 元々あまり得意ではなかった運動系の部活動もストレスになったか？
1981年	18歳	関東の大学へ進学。初めての一人暮らし。 自炊を覚え、ファーストフードはあまり食べなかった。

1984年	22歳	卒業研究で連日終電帰り。痔出血を発症。裂肛、見張りイボの診断。
1986年	23歳	軽い腸閉塞の症状を初めて経験。
1988年12月	26歳	便にわずかに血が混じる。がんではないかと恐怖を感じた。 自宅近くの胃腸科で初めての大腸注腸造影検査。医学的な異常はないが、大腸右半分の形がいびつ。ストレスのせいと言われた。
1991年	29歳	連日の深夜残業、休日出勤が続く。次第に手足の冷えを感じるようになる。
1992年	29歳	始めて下血。大腸炎の薬を処方される。 パニック障害のような症状で救急搬送を受ける。
1993年2月	30歳	関西地方へ転勤
1994年	31歳	始めて大腸内視鏡（ショートCF）検査を受診。 出血元は痔核とみられるとの誤診を信じる。
1997年頃	34歳	職場でのトラブルなどにストレスを感じる。 パニック障害のような症状が頻発。 徐々に下血の頻度が上がり、出血に恐怖感がつきまとうようになる。
1999年1月	36歳	正月早々下血で入院。上下からの内視鏡で初めて出血源が小腸であることを疑われる。小腸造影やメックルシンチなど諸検査を受けるも、診断付かず。
1999年7月		貧血が進行。職場近くの胃腸科で止血剤アドナを処方される。 まだクローン病という名も知らなかった。
2001年12月	39歳	起床間もないころ、突然の下腹部激痛で救急搬送。翌日まで様子見となったが、激痛で地獄の苦しみ。夕方、小腸穿孔による腹膜炎との診断で緊急手術。下部小腸を2mほど切除。 外科医師によって初めてクローン病と診断された。 病室からのネット閲覧で新潟大学の安保先生の文献を見つける。 消炎鎮痛剤の使用は治りを遅らせる。血液の循環をよくすると症状はつらいが、結局早く治るとの主張に同感する。

2002年夏	39歳	下肢の強い冷えを感じる。職場の冷房に耐えられず、足に毛布を掛けて仕事をした。 毎日数回の下痢が延々と続く。
2003年	40歳	CRPの上昇、貧血が徐々に進む。 初めてレミケードを投与。初回のみ普通便に戻り、痔痛も改善。顕著な効果あり。
2003年12月～	41歳	CRPが17まで上昇。腹腔内膿瘍の疑い。 年末年始休暇中は全て入院。抗生物質の投与。 耐性菌により抗生物質が効かず、39度を超える高熱頻発。 レミケードはツケのほうがるかに大きいと実感。
2004年4月		抗生物質の投与を中止し、IVHによる絶食開始。 腸の癒着の疑いが強く、医師からは再手術を勧められたが、希望しなかった。6月、CRP=0を以って退院。
2005年11月	43歳	郷里、愛知県の事業所に希望転勤。
2006年		大阪の事業所を超える激務。残業、休日出勤が大幅に増加。
2006年12月	44歳	ノロウイルス感染をきっかけに2001年手術のふん合部に強い狭窄。腹痛、嘔吐に苦しむ。
2007年	45歳	小腸内視鏡を試みるも、重度の敷石様こぶで挿入できず。 2回目の検査も癒着、瘻孔の発見により中断。 狭窄の改善は再手術しか選択肢がなくなる。
2007年3月	45歳	再手術により小腸を80cm切除。癒着、瘻孔が何か所もあり、まとめて切除せざるを得なかったとの説明を受けた。 残存小腸は必要な栄養を吸収できるギリギリの長さだと思ふようにと。
2009年7月	46歳	再手術後、CRP=0が続いていたが、特定疾患更新のための内視鏡検査で潰瘍の再発を確認。徐々にCRP上昇
2009年9月	46歳	Ryujiさんの手記を偶然見つけ、松本医院を知る。 免疫抑制の治療との決別を決意。

2. 知らぬが仏

今の医療水準からすれば、なぜもっと早くクローン病と診断されなかったのかと思います。21～22歳での痔、見張りイボ、小腸からの出血は典型的な所見です。なぜ切るまでクローン病とわからなかったのでしょうか。2回の手術で小腸の多くの部分を切除してしまったことは大きな代償となりましたが、宣告を受けるまでの間は普通に食事をし、仲間とお酒を飲むこともできました。エレンタールしか口にできないと萎縮した生活をしなくて済んだだけ良かったのではないかと考えることにしています。

2001年にクローン病の診断を受けてから、ペンタサとエレンタールが処方されましたが、入院中に知った安保先生の理論が正しいと思ったので、ペンタサを断りました。その後の診察中、カルテに“安保先生の本を見てペンタサをやめてしまった。”と書かれているのが目に入りました。困った患者だというニュアンスを感じるとともに、安保先生が主張される免疫を回復させる治療を異端視し、否定する医師共通の考えを知ることとなりました。

3. ストレスとの因果関係

パニック障害のような症状とクローン病。症状が重くなってきた1997年頃、きっと両者は関係があるのだろうくらいには思っていました。しかし、松本先生のコラムをいろいろ読み、その関連性は極めて密接であると、今や確信に変わりました。ストレスを受け続けることによって交感神経優位の状態が続き、リンパ球の比率も低い状態が続きました。自分自身でステロイドを作り続けていたことになります。

経過の冒頭に子供のころ、耳鼻咽喉科に通ったことを記しました。これは無関係ではありません。鼻水の治療に用いられる吸引はステロイドです。それを毎週数回にわたって数年間吸い続けていたことを後年になって知りました。

4. 主義とは真逆なのに

2007年3月の再手術では、安保先生の本を読んで以来信じてきた免疫を抑えない治療に自信がなくなり、イムラン（0.5錠×2回/日）を承諾しました。しかし、考えてみれば、免疫抑制の治療を拒んでも、免疫を回復させることはなにもして来なかったのです。

2年後、潰瘍が再発し、症状も悪化している状況の中、医師から勧められたのはイムランの増量でした。

5. やっぱり免疫を抑えてはいけなかった

どんなキーワードであったかは覚えていませんが、ネット上の検索で Ryuji さんの手記を偶然見つけました。そのとき、松本医院のことを初めて知りました。Ryuji さんの手記をご覧になって松本医院の門を叩かれた方は数多いことと思います。Ryuji さんは当時ネットの掲示板で知った方で、私と同じ IBD では有名な医療機関を受診していることがわかりました。一度だけでしたが直接会話をしたこともありました。松本医院での治療を開始してからは漢方薬を飲み続けてアトピーを発症しました。それは Ryuji さんのブログで写真入りで紹介されていました。あの Ryuji さんが行かれたところなら信頼できる。松本医院のホームページを夜が更けるのも気づかずに読み進めたことを改めて書くまでもありません。

IgE と IgG、クラススイッチのこと、免疫寛容のこと。安保先生の本には答がなかったことばかりで、天を覆い尽くしていた雲が一気に晴れたような心境でした。

日をそれほど空けることなく、松本医院に電話をしました。症状を聞かれ、「先生から鍼の指示が出ると思えますから先に予約を入れてください」と言われ、2009年10月2日の初診となりました。

6. 転機の訪れ

松本医院を知るのと同じ頃、勤めていた事業所の業績悪化（悪化と言っても収益が悪くだけで、社員の高負担は変わらない状況）により、技術系スタッフの集約化が図られることになり、転勤を求められました。しかし、このままでは体をつぶしてしまう。この機会に退職しよう。無理なくできる範囲で仕事をしよう。それを一度考えてからは決意が鈍ることはありませんでした。

イムランなどで免疫を抑える治療に行き詰まりを感じていたときに松本医院の治療と出会い、時を同じくして退職、独立の決意。風向きの変化、転機が訪れたと感じました。やっと苦しみから脱出できる 때가来たのだろうか……。ここでみるみるうちに症状が改善して・・・となれば、手記としてドラマのような面白いものになったのかも知れません。しかし、現実はそれほど甘いものではありませんでした。

7. 変化がないことのつらさ

他の患者さんの手記を読むと、人によってはごく短期間で断痢湯の効果が現れ、普通便になったという方が何人もいらっしゃいます。しかし、私自身については、短期の観察ではなかなか変化が現れませんでした。断痢湯を飲んでも、

飲んでも下痢は治まりませんでした。

お灸については、県内の治療院へ週1回通うようになりました。院長ご自身がクローン病で、中国へ留学して中医学を学ばれました。ご自身で治されて軽快するという実績をお持ちです。それ以外にも自宅ではほぼ毎日据えていました。

病歴が長いことや、2回の手術で免疫にかかわる細胞を多く切除してしまっていること、さらにはリンパ球の比率が10%前後とかなり低い私は不利で、人よりも時間がかかるとわかっているつもりでした。しかし、なかなか効果が現れないのはつらいものがありました。検査結果は横ばい。症状もなかなか改善しない状態が続き、ついつい薬を指示どおり飲まなくなってしまうました。考えてみれば、以前はエレンタールを減らせばみるみる症状が悪化していったものが、エレンタールもイムランもペンタサもなしで横ばいを維持できているのは、治療のおかげであつたに違いありません。

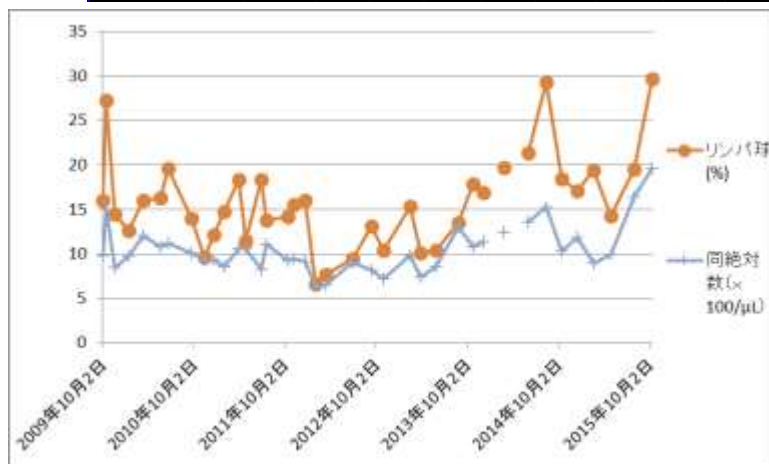
8. 心のあり方のこと

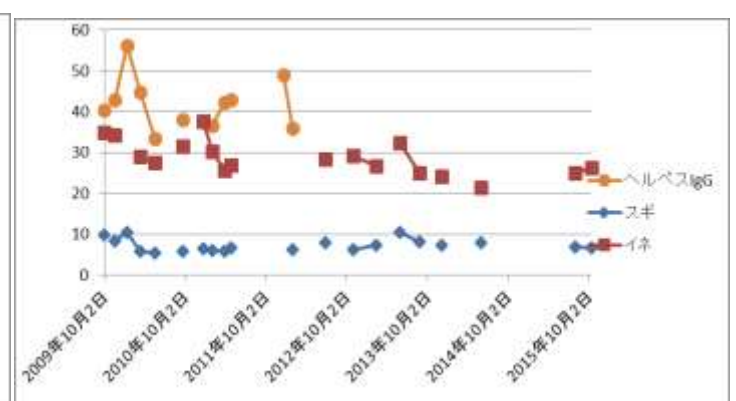
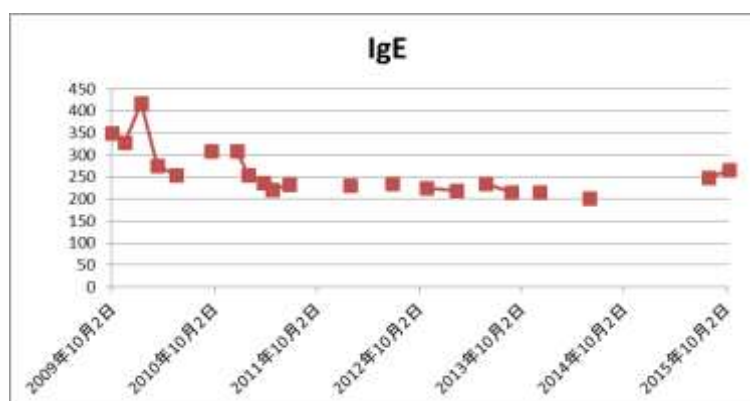
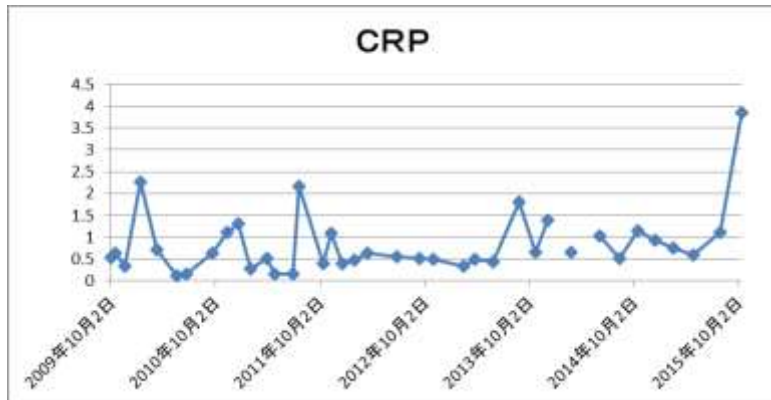
松本先生はこの治療は心の持ち方が悪いと効果が上がらないとたびたび書かれています。自分自身にも問いかけてみました。欲深く利益を追求していないか。他人の幸福を喜ぶことができるか。妬みはないか。後から治療を始められた方々にどんどん追い抜かれている私ですが、妬みの気持ちはありません。つらい思いをした本人でないとわからないことがあります。わかるからこそ、そのつらさを脱出した方を祝福することができるのだと思います。よかったですね。ほんとうによかったですねと。

9. 経過を数字で見る

2010年10月に初めて松本医院を受診して以来、血液検査の結果は残してあります。6年分のデータを使ってグラフを作成してみました。私なりに気付いたこと、ポイントとなることを記します。

日付	体重(kg)	CRP	血沈	MMP3	HGB	血清鉄	WBC	リンパ球(%)	同絶対数 (x100/ μL)	シングルアレリ				TARC	所見
										IgE	ヘルペスIgG	スギ	イネ		
2009年10月2日		0.53	11	83.5	15		6100	16	9.76	349	40.3	9.84	34.9		
2009年10月16日		0.64	3		15.8	72	5500	27.3	15.02						
2009年11月18日		0.33	3	77.7	15.4	68	5800	14.5	8.41	329	42.9	8.42	34.3		
2010年1月13日		2.26	15	77.3	15.1	42	7700	12.6	9.70	418	56.2	10.5			
2010年3月12日	57.0	0.71	17	77.7	14.7	46	7500	16	12.00	275	44.8	5.84	28.9		2/7発熱あり
2010年5月19日	58.2	0.11		60.9	14.8	113	6600	16.3	10.76	255	33.4	5.27	27.5		退職、独立
2010年6月22日	58.2	0.16	5	109.6	13.7	54	5700	19.6	11.17						
2010年9月21日	60.0	0.64	10	76.5	13.8	30	7200	14	10.08	309	38.1	5.89	31.6		
2010年11月12日	59.6	1.1	11	81.5	14.2	55	9600	9.6	9.22						
2010年12月22日	59.8	1.3	13	78.8	13.9	43	7700	12.1	9.32	309	37.5	6.49	37.7		
2011年2月1日	59.4	0.27	10	73.6	14	38	5800	14.8	8.58	254	36.6	6.02	30.3		
2011年3月29日	59.6	0.52	9	99.9	13.9	41	5800	18.3	10.61	236	42.3	5.7	25.7		
2011年4月27日		0.15	10	71.9	14.5	38	9200	11.5	10.58	222	42.9	6.71	26.9		
2011年6月28日	59.0	0.16	12	64.9	13.7	78	4500	18.3	8.24	233					
2011年7月20日	58.6	2.17	12	71.8	14.2	29	8000	13.8	11.04						風邪症状あり
2011年10月12日	58.8	0.4	12	62.4	13.5	28	6500	14.2	9.23						
2011年11月8日		1.08	5	77.1	13.9	36	6100	15.5	9.46						狭窄様の症状あり。全体的にはよい
2011年12月20日	59.0	0.4	9	70.9	14.3	41	5700	16	9.12		49				
2012年1月31日	58.0	0.47	8	69.2	13.9	31	9500	6.6	6.27	232	36	6.14			
2012年3月14日	58.0	0.64		92.2	13.8	24	8500	7.7	6.55						業務多忙な状況が続く
2012年6月27日	59.2	0.56	8	37.4	14.7	39	9600	9.4	9.02	234		7.84	28.4		6/23 飲酒にて卒倒 交感神経過緊張?
2012年9月12日	60.6	0.51	9		14.3	44	6200	13.1	8.12						
2012年10月30日	60.6	0.49	10		14.8	39	6900	10.4	7.18	226		6.18	29.3		
2013年2月13日	60.8	0.33	7		14.6	33	6400	15.3	9.79	220		7.26	26.7		
2013年3月27日	61.2	0.5	8		14.2	48	7300	10.1	7.37						
2013年5月29日	59.2	0.44	13		14.6	41	8200	10.4	8.53	235		10.5	32.4		
2013年8月27日	58.0	1.81	15		14.1	20	9600	13.5	12.96	215		8.01	24.9		
2013年10月23日	59.0	0.66	15		13.7	57	6000	17.9	10.74						
2013年12月6日	58.4	1.38			13.2	21	6700	16.9	11.32	216		7.22	24.2		狭窄によるおう吐。エレンタール服用
2014年1月22日	55.4														
2014年2月26日	53.6	0.66	30		13.4	32	6300	19.7	12.41						
2014年4月4日	55.0														
2014年6月3日	55.4	1.03	11		13.9	42	6400	21.3	13.63	202		8	21.4		腕や脚にじんましん発生
2014年8月12日	55.8	0.51	12		13.2	56	5200	29.3	15.24						
2014年10月15日	56.8	1.15	13		13.3	40	5600	18.4	10.30						
2014年12月16日	56.6	0.94	10		12.9	38	6900	17.1	11.80						
2015年2月18日	57.2	0.75	13		13.1	31	4600	19.4	8.92				334		
2015年4月28日	56.2	0.59	17		13.2	40	6900	14.3	9.87				392		
2015年7月31日	55.8	1.1	28		12.6	47	8400	19.5	16.38	249		6.77	25	404	下腹部ガス溜り
2015年10月13日	55.2	3.86	16		13.1	22	6600	29.7	19.60	266		6.64	26.3	332	
									0.00						
									0.00						
									0.00						
									0.00						
									0.00						





10. 少ないリンパ球

初診から半年ほどたったころ、CRPは0.1台まで下がります。(MMP3は相

対的にやや高い値を示したのは、なぜだかわかりません。) 独立後、間もないころです。新規の事業主にすぐ仕事をもらえるはずもなく、反対に仕事に追われることもなく過ごしていた時期です。しかし、下痢は相変わらず続いていました。

その後、2012年に入ると、CRPはおおよそ0.5台で推移しました。この頃はといえば新規のお客さんから仕事をいただけるようになり、複数の仕事を同時並行で進めるなど、多忙な日が続いていました。そのことと関係があるのか、リンパ球は15%を超えることがなく、1桁のこともありました。ちょうどその時期の6月には友人たちとビールを飲み(止めていたのでめったに飲まないのですが)、路面電車に乗ると気分が悪くなり、下車したらそのまま気を失って卒倒しました。気づくと通りがかりの若いご夫妻が介抱して下さり、運転士さんがけがの処置をして下さっていました。調べてみると、一時的に脳への血流が不足したためようでした。文献には交感神経が優位になっているときになりやすいとあり、自分なりに納得しました。

11. 3年目の秋、しつこかった下痢が

そのあと、2012年の秋から2013年3月頃にかけて、変化が現れました。あれほどしつこかった下痢が毎日ではなくなりました。軟便から普通便に近い状態になりました。CRPは依然として及第点ではありませんでしたが、血沈はおおよそ1桁の水準でした。体重は徐々に増え、2013年3月には61.2kgに達しました。2010年3月から比べると+4kgです。

私は小腸を広範囲に切除しているため、炎症がひどくなって栄養が吸収できなくなるとすぐに痩せていきます。体重の増加は栄養状態の改善とともに、炎症も軽くなっていることを意味していました。

12. やっとリバウンド?

2013年の春、体重が最大値を示すと、今度は減少に転じました。CRPや血沈も上昇しています。さらに、ヘモグロビンを見ると、この時期は明らかに連続した低下がみられます。潰瘍からの出血がひどくなっていたのではないかと思います。

同年の年末になると、右わき腹の痛み、通過障害を感じるようになりました。ひどいときには夜中におう吐することもありました。線維化による狭窄は元に戻らないのですが、経験的にそうではないと感じていました。炎症によるむくみが取れてくると、何も支障がなくなるのです。

食べ物を控えていたため、体重はみるみるうちに減っていきました。201

4年2月には体重が53.6kgまで減少しました。最大時から8kgの減少です。時を同じくして、血沈が30と、今までにない数値を示しました。

松本医院へ通うようになってからはエレンタールを全く使っていませんでしたが、この頃はエレンタールなしでは生活できませんでした。松本治療を始めてもっともつらい時期でした。今にして思えば、リバウンドだったのでしょうか。しかし、そう思う余裕もありませんでした。

13. 初めてのじんましん

症状がひどい時期を脱した2014年5月、腕がかゆくなり、掻きむしりました。どう見てもじんましんでした。次に行ったときに先生にお見せしようとして、携帯で写真を撮っておきました。ちなみにじんましんとアトピーは起こっている皮膚の深さが違うだけで、現象としては同じだそうです。漢方、鍼灸による治療を始めて4年半にして、やっとアトピー（じんましん）が出ました。



6月の診察は副院長先生でしたが、報告を聞いた院長先生が隣の診察室からおいでになり、握手をしていただきました。「Sさん、やったな。」

14. 油断

自分にはこの治療が効かないのかと思ったこともありました。ずいぶん時間はかかりましたが、先生から言われたとおり、アトピー（じんましん）が出たのです。これでRyujiさんと同じように私もクローン病から脱出できる。そう思いました。

しかし、ここでも病気の厳しさを思い知らされることになります。はっきりとした自覚はありませんが、ほどほどに薬を飲んでいけばよくなっていくだろう。そういう安易な考え、甘えがありました。通院回数が減り、2週間分の薬を飲むのに2~3ヵ月もかかってしまうことがありました。冷蔵庫にお茶と薬が入っていれば、つついお茶のほうに手が伸びてしまいました。その結果は・・・。

CRP、血沈とも高い数値を示すようになりました。ヘモグロビンも連続して低下しています。通っている地元の鍼灸院で顔が青白いと言われたこともあり

ました。せっかく改善してきたものを逆戻りさせてしまったようです。

15. 薬のこと

2015年12月のある日、薬局の薬剤師さんから夜遅くに電話をいただきました。

薬：「あまり薬が飲めていませんね。」

私：「はい。先生からも病気をなめるなどお叱りを受けました。1日に500ccを2種類ではどうしても飲みきるのに時間がかかってしまいました。」

薬：「1リットルではきついですよ。もっと煎じる時間を延ばしても結構ですから、量を少なくしてみてください。」

助言をいただいたとおり、小さいペットボトル1本に1口余るくらいの量まで煮詰めることにしました。苦い薬がより苦くなりましたが、苦痛は感じませんでした。まだ「きっちり」とはいえませんが、5～6倍もの時間をかけてというひどい状態は大幅に改善するようになりました。

16. 免疫の数値

薬を十分に飲まなければ症状は目に見えて悪化します。ただし、それは数週間、数カ月というスパンで進むため、気づきにくいのです。ちょうど「ゆで蛙」のたとえ話が当てはまるでしょうか。そんな状況ではありますが、ここ最近では目に見える変化が起こっています。

・リンパ球

比率、個数とも少なかった2012年と比べると、最近は明らかに比率が上がりました。少ないときは700(個/ μ L) 台だった個数は、直近のデータでは2000に迫る数です。クローン病の宣告を受けて以来、経験がないほどです。

・IgE、シングルアレルゲン

検査結果には免疫に関わるいろいろな数値が出ていますが、傾向をつかみやすかった2項目を挙げました。6年分のデータを見ると、一時的な上昇や、直

近の数字は揺り戻しがみられるものの、傾向としてはごく緩やかに下がってきています。I g Eはじんましんが出始めたころの2014年6月に最低値を記録しています。

なお、I g GがI g Eにクラススイッチすれば、I g Eの数値は上がるという誤解を招きそうですが、両方の数値が下がっていくことが認められます。正直なところ、薬の飲み方が十分であったとはいえませんが、着実に効果は出ていると言えるでしょう。これらの数値は急な変化が起こることはなく、治療を長く続けることで改善はしていくと言えるのではないかと思います。

17. なぜやめずに続けてきたか

正直なところ、くじけそうになったことは何度もありました。しかし、2回のオペで小腸が短くなっている私にはあとがありません。いくらきつい症状に苦しめられても、いわゆる「標準治療」に戻ろうとは思いませんでした。一時は症状がひどくなり、入院しなくてはならなくなるかと思ったこともありました。それでもやめずにこの治療を続けているのは、たとえ時間がかかっても、着実に前進していると思えるからです。反対に、多くの方が受けている「標準治療」では決して治らないと思うからです。

「断痢湯」なのに下痢が止まらない。薬の名前ずばりの効果は期待せず、苦さが免疫に刺激を与え続けるためだと考えました。

薬を飲んで熱が出たり、炎症がひどくなって嘔吐したり・・・、そういうことがあると、世間一般では薬を飲んだから悪くなった。だからその医者はヤブだ、飲んでいた薬は即刻中止だという方向に向いてしまうのでしょうか。しかし、これも治る過程で通らなくてはならない道であることを自ら体験しました。ほかにも免疫抑制を行わず、回復させる方針の医療機関があるようですが、納得できる理論、実績を上げているところは他に知りません。

飲んでいないのとあまり変わらない飲み方を改めたのは、2015年10月の診察後です。それから3ヵ月になろうとしています。この間、血液検査を受けていないのでデータはありませんが、体重は58kg台まで回復しました。

中途半端を続けることに慣れてしまったことは大いに反省しなければなりません。早く松本医院を卒業することを目指していきたいと思います。